

---

The another stories **新撰組**

なかむら 奏多

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The another stories 新撰組

### 【Nコード】

N4241P

### 【作者名】

なかむら 奏多

### 【あらすじ】

The another stories 新撰組 「暗殺者のセオリー」は短編として発表しました。

その後、オムニバスとして書き加えた短編をここに連載させていただきます。

\*桜の遺言\*

芹沢鴨ら水戸派が肅清された後、水戸派の生き残りとして新撰組に止まっていた野口建司の最期を、遊女との儂い交わりと桜の花になぞらえて描きました。

\*総司微熱抄\*

水戸派芹沢鴨の殺害に加わった沖田総司は、それを正義だとは思えずにいた。

池田屋騒動の最中に昏倒した総司だったが、そこで芹沢鴨の幻影を見たのだった。

後悔や焦りに翻弄される総司の姿を描きます。

## 桜の遺言

どうして……

あの夜、俺も一緒に殺されてしまわなかったのだろう。

建司はため息をついた。

往来に面した窓の障子をそっと開けると、格子の向こうには、いつもと変わらない風景が広がっている。

新年を迎える支度に忙しい人々の声が、路地の隙間から小さく聞こえ、清々しく光る屋根瓦の上には、青空がどこまでも続いていた。

建司に残された僅かな時間が、やがて費えた後も、きっと空は青いままであり続けるのだろう。

「会いに行けなくなるな」

建司はつぶやいた。

先の非番の日に、ふらりと北野の遊里まで足を延ばした。そこで建司は、雪乃という名の遊女と出会った。

月夜に浮かぶ桜の淡い花色を思わせる女だった。

女と情を交えることに、あまり執着しない質だった。けれどこの日、建司は雪乃の体から立ち上る、湿った甘い匂いに胸がざわついた。

無口な女だった。建司も饒舌なほうではなかった。互いにどれほどの言葉も交さなかった。

雪乃が火を付けて寄越した煙草を、建司がひと口吸う。吐き出された煙が、座敷の空気の流れにそって、やんわりと広がる。煙管を返すと、雪乃はそれを煙草盆に向けてぽんと叩く。丸い灰が灰吹きに転がり落ちた。

雪乃が建司の肩にしなだれかかる。言葉はなくても、仕草で喋る。

雪乃の衿の弛い打ち合わせから、建司はその手を忍ばせた。暖かい乳房が手のひらに触れた。

割床の衝立のあちら側で、別の遊女と客の交わりが始まっている。微かな衣ずれの音に、女のあえかな吐息が重なって聞こえてくる。

「冷とおす」

ふふつと笑った雪乃の細い腰を引き寄せ、そのまま情交する。

雪乃を抱きながら、建司は姉の事を思い出していた。

桜の散る頃になると、姉はその花びらの美しいところを丹念に針で掬い、首飾りにしつらえた。

「ほら建司、いい匂い」

「やめなよ、姉さん。もうそんなことして遊ばないって決めたんだ」  
口を尖らせ嫌がる建司の首に、むりやり花の輪をかけると「なんだ、つまらない」と、姉はいたずらっぽく笑って逃げて行った。建司の鼻先を ふわりと桜の花の香りがよぎる。

ああ、この匂いだ。雪乃さんは、桜の花びらの匂いがする。

姉は祝言の日取りが決まったというのに麻疹に罹り、あつという間に逝ってしまった。十七だった。目を閉じた雪乃の顔と姉のそれが重なる。

姉が逝ってひどく哀しかった。それでも飯を食い、友人と笑い合っている自分が、建司には腹立たしかった。

その頃、建司の伯父は、尊穰激派の幹部として名を馳せていた。在郷の有土らと郷校に集結していた伯父を頼り、建司は突き動かされるようにして、家を出た。

元服前の少年を 厳しい時代の渦に巻き込む事は出来ない。諫める伯父を前に建司は激昂した。

「前髪が取れてから、出直して来い」

その時建司は、ひとりの男に怒鳴りつけられた。伯父の心中を察しての事だ。

「家を出て来たからには、俺にも覚悟があります」

「子供じみた、つまらん覚悟などいらんわ。とつとと帰れ」

男が建司の左の衿を力任せに掴んで揺さぶった。引きずり倒されそうになるのを建司は必死で堪えた。

「ならんと言われるなら、前髪など今直ぐにここで落とします」

建司は男を睨み付け、そう言った。

「学問も剣術もまだ中途ではないか」

伯父が困った顔で建司を諭す。

「なんと言われましようとも、ここを動きません」  
堅くなな建司の態度に男の手元が弛んだ。

「このまま返したら、どこぞで自刀しかねませんよ、野口さん。しかたない。俺が面倒を見ましよう」

「そうしてくれると、ありがたい」

「これでお前も同志だ。誠忠を尽くせよ」

そう言って男は頬を崩した。まだ入牢前の芹沢鴨の精悍な姿だった。

だが、その芹沢も既にこの世にはいない。

雪乃から体を離れた建司は、仰向いたまま天井の木目の節を数えた。

大切な人は皆、俺の腕の中をすり抜け、遠くへ逝ってしまった。

いつの間にか涙が頬を伝い、こぼれ落ちた。

「いや、泣いたはるわ」

白粉を塗った頬をすりよせ、雪乃はその涙を舌でなぞった。その唇が自然に建司の唇と重なりあう。

こういう生業の女は、客に体を開いても唇は許さないものだと思っている。

「ぬしさんだけどす」

雪乃は柔らかい体を建司の上から重ね合わせた。弛い曲線を描いて結び上げられた鬢が、ほつれるのもいとわなかった。

あの日の前髪の少年は全てを無くし、その魂は京の坊條を彷徨っている。そして心優しい遊女が、その魂を偶然指先でとらえたのだ。

約束はしなかった。ただ、別れ際に指を絡ませ、儂い時間を愛しんだ。

そして建司は、屯所の一室に幽閉されているのだった。

今朝方の事だ。局長に呼び出され、数名の平隊士に周囲を取り囲

まれた。土方の目配せで、やにわに羽交い締めになれ、鼻面が畳に擦れんばかりに、首の根元を押さえつけられた。土方が甲高い声で建司を詰問する。

先の非番の日、水戸浪士の名を騙り乱暴狼藉を働いたという者が二名、新撰組隊士の手で捕縛され、所司代に引き渡されたという。

「それと、俺にどういふ関係があるというんです」

「それがな、野口。奴らの口から、おめえの名前が上がったんだよ」

「そんなはずはありません。そいつらの名を教えて下さい。申し開きはどのようによでも」

「残念だが、申し開きには及ばんねえよ。おめえが本国寺に出入りしているのは、とうに調べがついてらあ」

土方が声を荒げた。近藤は建司の顔を見ようともしない。

あ……。

なにもかも濡衣だ。建司は言葉をつまらせた。そして静かに諦めた。これが建司に用意されていた結末だった。

「副長に知れたらまずいです」

「構わん、会わせろ」

見張りの隊士と押し問答の末、座敷に入って来たのは永倉新八だった。

「すまん。庇ってやれなかった」

永倉が畳に額をすりつけた。芹沢らが殺され、独り残った建司を永倉が影で支えていた。死に急ぐなど。

「頭を上げて下さい、永倉さん。いいんです。このままでは済まないと思っていましたから」

「しかし、あまりにも卑劣な」やり方ではないかと、永倉は拳を震わせた。

「どうにかして逃してやりたい」

「止めて下さい。そんなことをしてもすぐに捕らえられます。永倉さんだって、ただでは済まない。それより永倉さんは生き延びて、俺達の信じた事が間違っていないなかったかどうが見届けて下さい。約束ですよ」

「建司……」

永倉は建司の覚悟に絶句した。

「それより永倉さん。頼まれてくれないかなあ」

建司の声が急に和らいだ。

建司の身の回りのものを収めた行李の中に、小さな箱包みが入っている。それを北野上七軒にある妓楼松葉屋に抱えられている、雪乃という名の遊女のもとへ届けて欲しいと言うのだ。

「約束でも交しているのか」

「そんなんじゃ、ありません。ただの心尽くしです」

建司が最期に託したのは、遊女へ贈る小さな箱包みひとつの想いだった。

「野口建司。本日ここに切腹申し付ける」

切腹は作法に則り行われた。刃を握り、仰向けに倒れないよう三宝を尻に敷く。刃で十字に腹を引き裂く。

声を洩らさぬよう、建司は痛みを忍従する。そしてゆっくり首を差し出した。

介錯人は安藤早太郎。安藤は刀を振り上げたまま、これが武士というものの最期かと、建司の澱みない所作に見入ってしまった。

このままでは、痛みを失ってしまう。前につつ伏してしまったら、まともな介錯は得られない。我が意に反して、体は苦痛にのたうち回るだろう。せめて最期は気高く逝きたい。

「早くっ」

建司は絞り出すように叫んだ。その刹那の声に、安藤ははっと気を取り戻した。振り上げた刀を建司の首筋めがけ、振り下ろす。白

く光る刃が、建司の項に吸い込まれ、頸堆を断ち切る音がパンと鳴った。

見事な介錯だった。地面に転がった建司の首が、ゆっくり微笑んだ。

師走。二十七日。野口建司逝く。享年二十歳。遺体は光縁寺に埋葬された。文久三年は、こうして暮れていった。

志高くして三条大橋を渡った早春。あれは幻であつたかのように、月日はかくもむごたらしく流れていくものだ。

そんな思いに苛まれながら、永倉新八が上七軒の松葉屋に雪乃を訪ねたのは、年が明けてしばらくしてからのことだった。

箱包みの中には、鼈甲細工の櫛が入っていた。

死んだなんて言っちゃ嫌ですよ。そうだ、急ぎ国許へ帰ったと伝えて下さい。

永倉はそれをやっとの思いで雪乃に伝えた。雪乃はしばらく永倉をみつめていたが、櫛をすげ替えると「そうどすか」と、はんなり微笑んだ。

雪乃の後ろで、建司が満足そうに笑って立っているようで、永倉は泣きそうになった。

帰り際、雪乃が永倉の手に握らせた匂い袋は、仄かに桜の花の香りが出た。

「御守りどす。死なへんようにて」

雪乃はきつとこれを建司に持たせたかったはず。

建司よ、これは俺が貰っておこう。俺は死なない。

永倉はそれを大切に懐にしまった。

桜がほころび、花びらが風に舞い散る。

妓楼の張り見世で、雪乃は煙管をくわえ客待ちをしていた。

格子の隙間から舞い込んできた桜の花びらが、着物の裾の紅い蹴出しにとまった。誰かが、それを指先でつまもつと手を伸ばす。

「そのままにしときよし」

雪乃はうつとり目を閉じ、初めて唇を重ねた男の、遠い囁きに耳を澄ませた。

雪乃さんは、桜の花びらの匂いがする。

## 総司 微熱抄

微熱にまどろんで口走る、戯言と思つて聞いてほしい。逃れられない運命というものは、やはりあるのだと思う。

江戸を離れ上洛すれば吹く風の方角も変わる。風は心の片隅に積もる埃をきれいに運び去ってくれる。俺の心はそんな期待にあふれていた。

しかし、身の置き所を変えろということは、江戸を離れるという物理的な事象だけでは、どうしようもないのだと気付くのに、たいして時間はかからなかった。

かえつて辛くなった。

誰かのせいにしてはならない。選択を間違えたのは俺だ。脳裏に浮ぶ怨み言を何度も打ち消し、俺はいつも笑っていた。

強張った笑みは、面のように俺の顔に貼り付き、取れなくなった。

幼い頃から思っていた。俺は長い夢を見ているのだと。ここにある醜悪な現実とは幻で、本当の姿は別の次元に息づいている。そして、慈しみに満ちた時を育んでいるのだと。

やがて朝がくれば目覚める。この現実はずたかたで、目が覚めてしまえば跡形もない。もうひとつの現実が俺にはあるのだ。そうやって自分を騙しながら暮らしてきた。

俺の心の内にひそむ、いびつな願望は、時に激しいうねりとなり感

情を突き動かす。

自分の意識とは別の者が心を支配し、俺は周囲の者をどれほど傷付けてきたかわからない。

どうして目覚めない！

俺は声も出さずに嘆く。気づくと、朽ち果ててしまった希望が、荒野にさらされ乾いた風に揺らいでいた。

人はみな、あやうい。おぼろげな輪郭しかない物を、瞳の裏に確かな映像として結び、海馬の混沌に刷り込んでゆく。

東の空の山の端の、低く雲たなびくあたり。わずかにそれて白い真昼の月が、くつきり浮かんでいる。それでも背景の空の青が透けて見え、今ここにある確かな自分の存在が、ちっともそうではないのだと、俺を見下ろしている。夜になれば、妖しく輝き、人の営みの律動を陰へと誘おうというのに。

俺はまるで、その白い月の陰りに吸い寄せられる悪鬼のようだ。

三年前に麻疹を患った。それ以来、微熱が続いている。微熱が連れてくるまどろむような心地よさは、現実と幻の境界を曖昧にした。そうやって微熱に惑わされているすきに、邪悪な気配が俺の神経を蝕んでいった。体も心もすでに自分の物ではないようだ。

あの男に初太刀を浴びせたのは俺だった。生暖かい返り血が俺の頬に散る。点は面となり、鮮やかな記憶からあの男の温もりを俺の背中に呼び戻す。

男は俺を背中から抱き締めこう言った。

「お前の欲しいものは、全てわかっている」

「だったらどうして俺にそれをくれない」

「それは自分で手に入れるもんだ」

「じゃあ、どうして俺の背中を抱いてくれるのです」

「俺がしてやれるのは、こんなことぐらいだ。後の事は自分でもぎ取れ」

朝起き抜けに、酒をあおるのが男の常だった。昼を過ぎても酒の匂いが消えない。日々を重ねて、微かに甘い酒の香りが身にまとう太物の染めの匂いや、にじみ出る体液の匂いとあいまって、この男独特の体臭となっていた。

俺はこの匂いに酔っていた。ああ、あるはずのない幼児の記憶が、まるで俺のもののように甦ってくる。

はるか幼い頃に、男が覚えた無条件の愛を、その温もりで俺に伝えてくるのだ。そして男が棄てた息子に与えたかった温もり。

俺はその懐にある体温に溶けてしまいたかった。他には何もいらない。

しかし俺は、その傍らに寄り添うことは出来なかった。あの男の懐をいくらまさぐっても、俺の居場所などはない。

なぜ背中を抱いた。その気紛れに、途方に暮れてしまっじゃないか。

ひとつの影がふたつに別れ、その片方が俺でもう一方が芹沢なのを土方が見咎めた。

「何故あの男なんだ」

土方や近藤でないことを憤る。

あなたには俺が欲しいものがわかるか。自分のことで頭がいつぱいで、考えてみた事もないだろう。

「馬鹿なことを言うな。お前幾つになった。自分の事は自分で始末しろ。甘えるな」

土方が、俺のすぐる眼差しを煩しがる。あいつが必要なのは生身の俺ではなく、この剣術の腕だけだ。

ほんとうの俺は、あなたの見ようとしないうところにいる。あなたに見えているのは、総司という名の幻影だ。

芹沢の刃の切っ先が、俺の鼻の下をかすめた。どうせならこの首筋の頸動脈を掻き斬ってくれば良かった。血に塗れて俺もあなたと一緒に死ねた。

芹沢の体に覆い被さる唐紙の上から、何度も太刀を浴びせ、俺は泣き叫んでいた。

もう生きる道標など見失っていた。

「お前は、何か標を持たなければいけない。そんなことでは、ただの人斬りだ」

「だったら、あんたが標になってくれ。見失わないようについて行くから」

「お前についてこれるかな。そのためには、しがらみを捨てなければならんよ。出来るか」

芹沢は暗に、近藤や土方との訣別を仄めかした。

俺には出来なかった。その代わり芹沢を殺した。ひとつの生をもぎ取る事で、成就する想いもあるということを芹沢は知らない。

しかし悔るな。あの男の暖かい温もりは、俺の背中から消えようとはしない。

\*

元治元年六月五日。盆地の底を、湿った夏の空気が覆う。じつとりと生暖かい汗が、白い鉢巻の筋金の裏にたまる。

俺は抜き身の刀をぶらさげたまま、戸板に張り付く。替えの草鞋が腰のあたりで所在なげに揺れたた。

風すらおきない河原町三条。東に鴨川のせせらぎが聞こえる。

近藤をはじめとする六人で池田屋を囲む。表に一人、裏手に一人。出口を固める。踏み込むのは四人。

確かな情報は何もなかった。軒を数え、一件づつ風潰しに踏み込んでゆく。

その度に息を凝らす。首筋から肩へ、緊張が走る。抜き身を握る腕の血管が隆起し、毛穴がそばだつ。

数を重ねるうちに、だんだんと息が整わなくなってくる。唇で覚える息の数と、肺まで到達する深い吸気が比例しない。いくら息を吸っても充足感がないのだ。

苦しい……。

思わず着込みの襟元をゆさぶると、湿った空気が胸郭の皮膚を舐めるように入り込み、みぞおちのあたりで溜まる。

「御用改めでござる」

近藤が第一声を放った。池田屋の主は顔色も変えず応対する。

京では商人までもが、国事の方翼を担おうという気骨に満ちていた。

しかし、人の持つ強い思念は思わぬ波長を放つ。たぎるエネルギーが階段を伝い落ち、入口の土間で青い焰となりとぐるをまいているのが、俺には見えた。

ここだ。

俺達は直感する。

おそらく目指す相手は階上で密談の真最中だろう。

「中を改めさせてもらおう」

言うが早く、近藤が台所をすり抜け、狭い廊下を足早にゆく。京の町屋は鰻の寝床だ。間口は狭く、奥行きがある。階下は近藤に任せ、俺は階段を一気に駆け上がった。

階下をおぼろに照らしていた行灯の火が、主の息で吹き消され、階下は漆黒の闇の中に沈んだ。

遅れて来た者があるのかと、何も知らず男が出てきて、暗いなと呟いた。

俺は手にした抜き身を下から斜めに振り上げる。そのまま段を上がりながら男の懐へ潜り込むようにして胴を払った。体を斜めにかわすと、男は刀を抜く間もなく階段を崩れるように落ちていった。

近藤は裏階段から階上へ上がったらしい。

「新選組だっ！」

声上がる。開け放たれた座敷から廊下へ広がる淡い光がたちまちかき消え、天井低く闇が垂れこめた。

奪われた視界は、容易には戻らない。

眼を凝らすより先に、神経を尖らせる！同志打ちなど笑い草にもならない。俺は奥歯を噛み締めた。

鼻から吸う息が肺まで届かない。届かないうちに吐き出す。

気配を感じようとするが、耳の奥で響く呼吸の音がそれを邪魔した。

女の悲鳴が短く聞こえた。どこかで聞いた声だ。いきなり俺をデジャヴが襲う。

あの夜と同じだ。

鳥の濡れ羽の闇の色。喘ぎともつかぬ女の声。耳の奥を仕配する気管の雑音。

俺が追いかけているのは誰でもない。ただ芹沢の姿だけだ。

切っ先に確かな手応えがあった。それは深く骨を断ち切る感触。パシりと鳴ったのは誰の骨が断たれた音だ？

俺はいつの間にか、裏庭に出ていた。降り注ぐ月の光が、狂おしく俺を陰へと誘う。正眼に構えた男の裸足がじりと動いた。そして笑む。

「俺を切り捨てる。そして再び恍惚となれ。それよりほかに、お前に残された道があるか」

「いまさら、俺のことは構うなッ！」

「ひとつを手に入れたければ、ひとつを捨てねばならん。お前はそ

の選択を謝った」

「そんなことは、分かっている」

「死ぬまで苛め。己自身を」

芹沢はそう言って消えた。

芹沢めがけて夢中で太刀を振ったのは覚えている。あとは曖昧で、気付くと俺は路則に横たわっていた。

「沖田が気を取戻したようですよ。大丈夫ですかね」

誰かが憐れむように小声で言った。

芹沢に見えたのは長州の吉田稔麿だった。俺は吉田を討ち果し、そのまま昏倒したらしい。

「芹沢の亡霊を見た」

心配して覗き込む近藤に、俺は洩らした。

「夢をみたんだよ」

いや、あれは夢ではない。自分自身の体に巣くう、邪のあらわれだ。俺は知っている。全ては自らの成せる業だと。

仰向けのまま星月夜を見る。恒星が瞬き、光年の彼方から光を投げかけてくる。

ほら、星が降るようだ。

流線を描き、時期はずれに星が流れた。

こうしていると、地上にいる人は、あまねく独りだと痛感する。独りで生まれ独りで死んでゆく。標など持たなくても、たどり着く普遍の終焉だ。

俺はようやく起き上がり、土方を見た。土方の顔は大事を成した後の自信に満ちあふれ、上気していた。

あなたに迷いは無いのか。憂いは無いのか。その築いてきたものは、折り重なる屍体を踏み台にし、夥しく流された真紅の血に塗れているじゃないか。

いつまで続ける？ 終わりはあるのか？

祇園会所から、壬生屯所へ。星屑の降りそそぐ往来の土を踏み締め、蒼褪めた修羅が列を成して歩く。

見ろ！

足元で粉々に砕け散って輝いているのは星屑ではない。俺達の磨り減った魂の破片だ。

無口な隊列は見えない明日へ向かって進む。魂の破片を踏む音が、やがて壬生村に流れる西高瀬川のせせらぎに重なり、朱雀の竹林へ吸い込まれて消えていった。

皆はもう気付いていた。俺達は道に迷ってしまったことを……。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4241p/>

---

The another stories 新撰組

2010年12月25日23時12分発行